



「あのキツネ目のオッサン、亡くなったんか」と往診先のお宅で流れていたテレビを見て呟いたら、新人のナースにボカんとされました。グリコ森永事件を知らないそうです。この昭和史に残る未解決事件で指名手配された「キツネ目の男」に似ていたことから注目を集め、日本社会の表と裏を書き続けた作家の宮崎学さんが群馬県内の高齢者施設で亡くなりました。享年76。死因は老衰との発表です。

249 作家 宮崎学



遺言で「キレイな社会」に危機感

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

続いて老衰死は日本人の死因第3位。老衰死＝大往生という理解が、日本人に根付いてきた証左でしょう。

しかし、読者の皆さんは疑問に思われたはず。76歳で老衰？ 早すぎないか、と。確かに、老衰は

80代以降、平均寿命を超えたあたりから見られる兆候です。しかし、70代であっても「老衰死」といえない死があるのは事実です。

生物学者の本川達雄さんが書いた『ゾウの時間・ネズミの時間』という名著があります。自然界の哺乳類は心臓が15億回脈打つと死ぬことがわかっています。ハツカネズミは2〜3年で15億回、ゾウは70年で15億回。つまり動物によって時間の流れ方は様々で時間の感覚も違うという話です。僕は、

人間の中でも同じことが言えるのではないかと考えます。1日24時間という物理的な基準とは別に、個別的な時間感覚があって、それは一人一人異なるのではないかと。

だから時々、宮崎さんのように人生を生き急ぐ人も出てきます。宮崎さんの最期の著書はその名も『突破者の遺言』。一部抜粋して紹介させていただきます。

〈世界中がコロナ騒ぎだ／コロナショックというよりコロナヒステリーだ／だが癪に障るのは、今回のヒステリーがヒューマニズムで偽装されていることだ／ヒューマニズムは行き過ぎるとファシズムになる。清く正しく美しい善良な人間だけが「まともな国民」で、それ以外は「非国民」だという同調圧力が始まる。コロナヒステリーを機に、健康的にも衛生的にも「キレイな社会」を求める傾向は強まるだろう〉

ヒューマニズムで偽装された社会を拒むようにして、宮崎さんは旅立ちました。その気持ちだが、今、痛いほどわかります。